

日本人の自然観と自然保護

越川 正

戦後の高度経済成長と技術革新によって、山を崩し木を切って無秩序な開発が進められ、国土の自然破壊が巨大化しつつある現在、森林を守り環境を保護することは一般的には誰も反対はしないだろう。しかし、問題となる開発地域の関係者は『経済効率を全く無視する訳にはいかない』という。経済効率か自然保護かという論争はいつも平行線に終わる。そのような現在の日本人の考えの中には機能主義と価値観の多様性などによって自己分裂的な考え方がある。『日本人の生きがい』(宮城音弥)の著書の中に『追求人(同時に義務人)は、経済・宗教・芸術・政治において目標を作って、これに向かって前進する。追求人の種類はさまざまあるが、それを二つの型に大別することができる。(A)理想主義型(イデアリスト型)と(B)自己主義型(エゴイスト型)である。理想主義型の人自己を顧みずに生きがいたる理想を追求する。これに対して自己主義型は自分を押し出し、そのうちでも自分の利益になる物事を生きがいとして追求するエゴイスト(利己主義者)が多い。理想主義と自己主義は全く異なったものようであるが、ともに情熱(パッション)つまり持続的な感情傾向を示し、自分の考えを通そうとする自我肥大の傾向を持つ点で共通しているし、同じ性格の違った姿だといってもよい』と書いている。利益になる物事に生きがいを感じている多くの日本人は、会社・個人の利益を中心に機能主義的ケースバイケースでことにあたる。今の日本人の体質なのか?自己主義型社会優先の流れが幅をきかせ、自然破壊を巨大化し急速化しつつある今日、自然保護を唱えるわれわれは、開発の後から悲鳴をあげているような状況がそこにある。このまま自己主義的な考え方で自然を破壊してもよいのか。私たちはこのような状況に対してどのように考えたらよいのだろうか。

多くの人が自己主義的生き方になりやすい現代の風潮を一度根本的に問い直して見る必要があるだろう。日本人の心の原点までさかのぼって、私たちの祖先は一体どのように自然を見つめ、それを感じていたのだろうか。古典文学・歴史書・宗教思想・古典芸術など、私が感じた本の中から抜き出したものや、日本人の自然観に関して感じたことを折り込んで述べてみたい。

【神社は自然崇拜】

神社は日本人の自然崇拜・森崇拜と深くかかわっていると思う。今でも都市の中にただ一つ残っている森は神社である場合が多い。山の小高いところに岩がある。その岩は神様が下りてくるところで、岩と木が御神体になっている。その岩はある意味で天と地の接点で、その岩にはだいたい生命のシンボルとしての木が生えている。その巨木が人間の生のイメージなのである。古代人は人間というものを理解するときに、天と地の大きな接点にある一つの巨木として理解していたのであろう。その岩というのは永遠なものを表し、木は生々としたものを表す。だから、神道の中には、形而上学(けいじじょうがく)(人間がつくり出した様々なものの本質、存在の根本原理を論理的に考えや直観によって研究する学問)がある。これが本当は神道の意味なのである。根元はやはり、『人間は自然の中にしか生きられない』ということ。古代の日本人は知っていたのだと思われる。

【最澄思想】

最澄は自然が好きであった。もともと人間に対して抵抗感をもっていた。最澄の思想も自然に関係があったと思う。つまり『山川草木悉皆成仏』という思想である。すべてのものに仏性がある。すべての人間に仏性がある。全部仏になれる。けれど人間ばかりでなくて、生きとし生けるものは、すべて仏性がある。それは、すべて成仏できる、という思想が最澄にあるように思われる。その思想が後に発展して『天台本覚論』という思想になる。“山や川や草や木もみんな成仏できるのだという考え方がある。だから、そのような考え方は、人間だけがこの世界の中で特権をもっているというのではなく、人間も動・植物もさらに、山や川までも命が一つにずっとつながっているのが仏だ”という考え方である。私は、最澄思想の展開だと思うが、なぜこのような考え方が生まれてきたのであろうか。

日本では縄文時代から、あの貝塚というものが何であるのか分からなかった。今までは貝のゴミ捨て場ではなかったか、という説が有力であったが、

